

オックスフォード大学ボドリアン図書館附属

日本研究図書館所蔵『ひなづる』の翻刻・注釈並びに解題

勝 俣 隆

A Reprint, Notes, and Bibliographical Introduction to 'Hinazuru',
a Medieval Tale in the Collection of Bodleian Japanese Library
at the Nissan Institute, University of Oxford

Takashi KATSUMATA

凡 例

- 一、ここでは、イギリスのオックスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館所蔵の中世小説『ひなづる』の翻刻と解題を行う。
- 二、翻刻に当たっては、原本を調査した上で、その写真版による複製を基に、出来る限り、忠実に翻刻した。
- 三、従って、漢字・仮名の区別を初めとして、仮名遣い、宛字等はすべて原本通りに活字化した。
- 四、また、漢字の字体は、原本における使用例に従って、旧字体あるいは略自体を使用した。
- 五、誤字・脱字等は原本のまま記した。
- 六、本文には、句読点は施したが、濁音表記は付さなかった。
- 七、会話文・独白文・心中表現とも、原則として、『』をつけて示した。
- 八、「く」「ゝ」「々」等の踊字の符号は原本通りのものを用いた。

九、歌は、地の文より二字下げて書き出した。

十、本文の一行が終わるごとに、「記号を入れて、原本の切れ目が分かるようにした。

十一、段数は、絵巻物のため、一つの本文が終わって挿絵が始まるまでを一つの段の区切りとして【】の記号で区切りを示した。

十二、挿絵については、その内容の概略を説明した。

翻 刻

それ、あめつちひらけはしまりて、天神」は七代、てんの七よ
うをあらはし、地神は」五代地の五きやうをかたとれり。すてに
人」わうちやくたいは、これするなかくつきせぬ」御代をあらは
せり。こゝに、にんわうの第一をは」しんむてんわうとそ申ける。
このみかとお」めかしたをおさめ給ふにをよんで、四方のくに」
くそむくものをはしたかへ、したかふものをは」めくみ給ひ、
あまつしたねをおさめ、しつめ給」ひけるゆへに、四つのうみ、
なみしつかに、ふくかせ」えたをならさず、五こくゆたかに、た
みゆすき」事、そのかみ神代のとくにおなく、そのる」とくを
よふをもつて、しんむてんわうとそ」申たてまつり侍る。それよ
りこのかた、世々の」みかとはんきのまつりこと、をこたらせ給
はず。」めくみをほとこして、くにたみをあはれみ」たまふ事、
そのとくすてに、いにしへいま、露」はかりもたかふ事おはしま
さず。しかるに、にん」わう十三代にあたらせたまふみかとは、
せい」むてんわうとそ申たてまつりける。こと更」このみかとは、
せいとくたくしくおはしまし、」しんのみちをおこなひ給ひ、し
けき御めく」みは、つくは山のかけになぞらへ、国家ををさめ」

給ふ事、たくひなくおはしまし、たみをあはれみたまふ事、きゝ
すの子をはこくむかこと」く、りせいあんみんのてんしなりと」
天下」あま」ねく」たふとみ」たて」まつる】(第一段)

(挿絵一・宮中の紫宸殿において、巻物等の褒美を拝受する場
面を描いた図。簾越しに天皇の下半身が見え、庇の間に殿上人
が五人、着座し、童が一人侍る。階に殿上人が巻物の入った三
方を持って地面でお辞儀をする男に下賜する場面。その横に、
金等が入っていると思われる巾着袋を三方に載せて着座する男
性の姿。さらに、その右に細長い袋状の入れ物を沢山三方に載
せた男が立っている。左隅には、松等の樹木が見える。上下に
素檜霞が掛かっている。)

しかるに、此みかるとに、わうしあまたおはします。其」末にあ
たりて、姫君一人出きさせ給。御名をは、さゝれ」石の宮とそ、
申ける。みかとの御てふあいなゝめならず、い」つきかしつき給
ひけり。日にそへて、おとなしくおひ」たゝせ給程に、姫君すて
に御年十四才にならせ」給。ふようのかほはせ、あてやかに、柳
のまゆみとり也。」雲のひんつら、いと長く、雪のはたへ、なめ
らかに」たをやか成。御かたち光さしそふ心ちして、此よの」人
とも見え給はず。しかも御心かしこくおはしまし、聖」經の道に
くらからず、哥は神代のむかしをつたへ、」やくものふうをまな
ひ給。春の花・秋の月・のき」の梅かえ、咲そむれば、谷の鶯き
なきつゝ、山」たち花のかをとめて、雲井になる郭公、沢へ」
に匂ふかきつはた、みはしのものとのせうひのはな、」はきかはな
ちるたくれば、しかのねちかく聞」ゆるなり。おきのかれはにを
く露に、いとゝうら」むる虫のこゑ、空さへのほる嵐には、雪氣
の雲」もいさよふらん。これらの有様まで、御心をよせられ、折

にふれ、ことによそへてよみ給、哥のさま、又、「たくひなくそ
覚えける。されとも、姫君は、しつか」なる所に引こもらせ給ひ、
よもの山々かすみこめ」て、空うららかに長閑なる日影にあそぶ
いとゆふは「ちりかふ花をやつなくらん。かゝる折ふし、まな鶴」
つかひとひ來り、御庭の松のこすゑにすをかけ」つゝ、かいこを
そたてあたゝむる。日敷やう／＼かさなり」て、鶴の子すてにひ
など成て、すのうへにさしあかり」侍り。おやつるはいとよ
こへるいろありて、「松のうへにまひあかり、こゑをあけてうた
ふ」哥をきけは、

松の上にはひな鶴の、すたつは君の恵みそと、我住」国はう
こきなき、巖のこけはおひ敷て、なつ共つきぬ」よはひをは、
君もろ共に、池の水の清きなかれの末久し」

とうたひては舞、まひてはあそひける有様、御前に「有ける女
房たちをはしめまいらせ、とをきより見」きく人、みなきとくの
思ひをなし、めてたき」御事と」よろこひ」給ひ」けり」(第二
段)

(挿絵二・・・姫君が机に書物を置き読んでいる場面と、庭の
松の木の上で、雛を育てる鶴の夫婦の姿。姫君は十二単を着て、
長い黒髪を肩や背中に垂らして、俯き加減に机の書物を眺めてい
る。その横にお付きの女房が四人居並び、二人は母屋に、残り二
人は庇に着座し、庇の二人は鶴を眺め、母屋の一人も鶴の方を向
いているが、一人は奥の何かに気を取られたのか、反対方向を向
いている場面。女房たちに髪形は近世風である。几帳には、梅ら
しき樹木の絵、屏風には、葦辺の水鳥の絵と、別の座敷に、岩山
の上の三重塔の如き建物の絵が見える。庭では、大きな松の天辺
近くに鶴が巢を懸け、親鳥一羽と雛四羽が巢に入っており、その

上を雄と思われる鶴が舞って見守っている場面が描かれている。
松の下には、遣り水が見える。)

姫君は此ありさまを御らんして、あやしきこと」におほしめし、
はかせやすひこ丸をめして、うらな」はせらるゝに、やかて、か
んかへ申ていはく、『それ鶴は、「やうの鳥にして、いんにあそひ、
五竹のうちにはかね」のきをうけて、ひのせいにかち、みつから
たしるを」やしなふて、心みたりにさはかしからず。かねのかす
は」九つ、火のかすは七つ、あはせて十六の敷をそなへ、」むま
れて七年にしてはねをかへ、七年にしてたか」くとひ、又七年に
して舞あそふ事ちやうしにかな」ひ、又七年にしてその鳴こゑ四
きのでうしかなひ、百」六十年にして、いきたる物をころしくら
はず。千六百」年にしてかたちいさきよく、其色白し。其鳴こゑ」
天上に聞ゆ。或は又。其色くろうしてうるしのごとく、」とろの
ために上手かされず。又百六十年にして、めと」り・おとりたか
ひにすかたをみて、子をはらみ、また」千六百年の後は、たゝ水
はかりをのみて、しきをく」らふ事なし。此の時にをよひては、
鳳凰とともなひて、」大せいしんの世にあらはれ、まつりことす
くなるとき、」かならずかたちをあらはして、天下たい平のしる
し」をしめす。まことにこれつはさあるものゝうちに、」すくれ
てめてたきとくをそなへて、又せんにん」ののりものなり。され
は、鳴こゑてんに聞ゆるかゆへに、」其かしらのいろあかし。水
の中にしよくをくらふ故」に、くちはしなく、くかにすむゆへ
に、あしたかく」して尾みしかし。くもにかけりて、たかくとふ
か」ゆへに、はねゆたかにして、しゝむらをろそかなり。よ」く
いきをふくして、ふるきはらいて、あたらし」きをのむゆへに、
いのちなかうして、はかりなし。」いま、うらかたにあらはるゝ

ところ、すくれてめて「たき御事なり」と申ければ、ひめ宮「おほきに」よろこひ「おほしめして」さま／＼「御いはる」おほします」(第三段)

(挿絵三・・・鶴が松に巢を作り、哥を歌って言祝いだことを、姫君が不思議の思い、博士のやすひこを招いて占わせたところ、良い占方が出て、喜んでゐる場面。母屋の一番奥に姫君が十二単を着て座り、その前の庇に博士が着座し、占いの報告をしている様子。姫君の隣には、二人の女房が飲み物らしきものや、御礼の品を持って控え、前には重箱や三方が見える。敷居の上には童が侍っている。庇では、毛氈らしきものを敷いた上に二人の女房が座り、一人は松の上の鶴を見て、もう一人は、家の奥の方に向いて話をしているような様子に見える。庭では、松の木の上で、二羽の親鳥が四羽の雛たちに、餌を与えているらしい場面である。画面左奥には池があり、遣り水の水が水しぶきを挙げて勢い良く流れ込んでゐる様子が描かれている。画面の上下には素檜霞が掛かっている。)

かかりしほとに、うちとの人／＼、御よろこ「ひ申事かきりなし。こゝに、かのひなつる」やう／＼かいこのうちを出て、松の小えたを「つたはんとするおりふし、ちゝとり、えはみを」もとむれば、はゝとりはんをつとめたり。是「よりのちは、ことゆへなく、ひなつるすてに」おひたちて、つはさ大きになりしかは、空を「かけり、くもをわけてとふ事、こゝろまゝなれ」とも、すこしもよそへはとひさらすして、「ひめみやになれたてまつりて、御てんの庭」にあそひけり。さるほとに、ふうふふたつの「おやとりは、そのかたち日にそへてうるはしく、「いたゝきいよくあかくして、いはんかたなくう」つくしく、つはさのしろきこと、

雪よりも猶「ひかり有。あさゆふ庭にまひあそふ。ひめ宮」これに御こゝろをなくさみたまひ、月日ををくりおはします。このひめ宮の御かたち世に「たくひなくうつくしき事、もろこしま」ても、そのかくれなかりしかは、かのもろこしの「みかこのよしをきゝつたへたまひ、ちよくし」を日のもとにつかはして、「このひめ宮をもろこし」にわたし給へ。御きさきにそなへたてまつらん」と「そうもんありけり。くきやうせんきあり。『いかゝあるへき』と、とり／＼申させ給ふところに、みかと」のたまふやう、「そも／＼このやまととよあきつ」くには、あまつかみ／＼わつしんのいにしへより、今「人わうの世にいたりて、つるにみかとの御すゑ」をいこくにわたしたることなし。いまはしめて「ひめみやをもろこしにわたしたてまつらは、「いかゝせん。たとひいかなる事ありとも、「かなふ」ましき」よし」御返事」まし／＼「けり。」(第四段)

(挿絵四・・・中国の皇帝が、姫宮さざれいしを入内させるため、中国に渡すように申し入れたことに対して、公卿が天皇と諍議している場面。画面右奥に、簾に隠れた天皇の姿が見え、顔半分が見えている点が、注目される。天皇の前には、中国からの使者が尺を持て着座している。その間には、使者が持参した土産と思われる反物等が机に載せて置かれている。中国の使者の周囲は、母屋に四人、庇に三人の公卿が居纏している。右奥の公卿は隣の公卿と話をしている様子であり、他の公卿は、使者の様子を見守っている。屏風絵には、山や川と言った山水の風景が描かれている。庭では、松の木の下に、中国からの使者のお付きの物産三人が、主人の様子を気掛かりそうに見ている様子が窺える。)

扱も、かのすたちける五つのひな鶴、ひめ宮」にしたしみ、な

れたてまつり、あさゆふ御庭の「おもてにまひあそぶ。ふたつのおやつるは、」ある日の事なるに、ひめ宮の御ちかく参りて、御いとまを申とおほえたり。ひめみや御らんし」て、『いつかたへもゆかんとおもふころありや。かま」へて、こゝを思ひわするゝ事なかれ。やかてかへりま」いるへし。さりながら、つるもたくひのおほき物」なり。これをしるしにすへし。』とて、あかきいとを「おや子七つのつるのあしにむすひつけて、」そ、はなち給ひける。七つのつるは、こくうに」とひあかり、しはらくまひあそひて、いつく共」なくゆきにけり。ひめ宮も此ほとしたしみ」なれ侍へりければ、はしちかくたち出させ給ひ」ては、御ことをかきならし、月にうそふきおはしける所に、ゆめともなくうつゝ共なく一人の「天とうしのひんつらゆひて、うつくしきか、こく」うのうちよりあまくたり、ひめみやの御まへ」にかしこまりて申しけるは、『これより大かいの内」にみつ山のあり。ほうらい・はうちやう・えいしう」と名つく。このやまのうちには、もろくのせん」にんたち、あつまりておはします。君の日ころ」におほしめすむねある事を聞えよひたまひ、くにをあはれみ、人をめくみ給ふ御こゝろさし」をかんして、みやうにちこゝにやうかうあるへし。』たけ七しやくのとうたいに七つのもし火」をかゝけ、御てんのうち、にはのおもてをきよめて「七つのゆかを」かさり」七しゆのかうを」たきて」待給へ』とて、「童子は雲路に」のほり」けり」(第五段)

(挿絵五・・・月をなかめての姫宮の琴の演奏に、天童子が天降るところの図。母屋の中では、姫宮は琴を演奏し、女房が三人と童一人が側に控えている。庇にも、女房が一人居て、母屋の中を見ている。戸外には、松の木が聳え、その上方に雲に乗って天

降る天童子の姿が見える。「ひんつらゆひて、うつくしき」童子は、まさに、天稚御子の姿を彷彿させる。)

ひめみやふしきにおほしめし、とうしの」申せしことく、七しやくのとうたいにともし」火たかくかゝけ、ゆかをかさり、かうをたきて、『今」やおそし』と、まちたまふ。かゝりける所へ、五し」きの雲たなひき、おんかくのをとしきり也。』其のうちより、七つの霧にうちのり、七人の仙」人、御てんのまへにあまくたり給ひけり。をのく」一はのつるにのりたり。仙人たち、庭のおもてに」をりたまへは、うれしけにて、七つながら、ひめみや」の御まへちかくまいりて、をんかくにひやうしを」あはせまひあそぶを御らんするに、七つの霧」のあしことに、あかきいとそのまゝにのこりとゝ」まり侍りける。』さて、せん人は、七つのゆかに、をのく」さしたまふ。ひめみや、ありかたくおほしめし、御手をあわせて、らいはいあり。『いかにもしてよ』はひをのへ、いのちつきせぬ事はりを、みつからに」をしへてたまはれ』と、申せしか、姫」みやにかたりていはく、『それ世の中に、いきとし』いけるもの、よはひかたふかす、いのちつきせぬこと』まし。よはひかたふかす、いのちなかくひさしくた」もちて、やふるゝことなきは、これ身のをこなひ」こゝろのをきところ、そのゆへある事なり。ひめみやの御こゝろ、人をあはれみ、くにをめくみ、かう」くのおもひあさからす。いま、この事をおんする」ゆへに、われらこれまできたり。いてく」こまや」かに、せんほうのありさまをかたりてきかせ侍らん。しつかにこれをきこしめすへし』と、ありしか」は、みや大きによろこひたまひ、仙人を」らいはい』して」そのもの」かたりを」聞給ふ。』(第六段)

解題

ここに翻刻した『ひなつる』は、イギリスのオックスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館所蔵の中世小説である。

本書の書誌は、次の通りである。

①写本刊本の別 写本 ②所蔵者整理書名「ひなつる」 ③所蔵者整理番号 Ms. Jap. a. 109 ④外題 ひなつる (題簽 左肩、墨書) ⑤内題 なし ⑥書写年時 江戸初期頃 ⑦保存状態 良好 ⑧保存形態 桐箱入り ⑨表紙の生地、色、模様 絹 宝尽くし地 ⑩見返し 金泥 ⑪料紙 鳥の子紙 金銀で草花模様を描いた美麗なもの。⑫装丁 卷子本 ⑬数量 上一巻。下欠。⑭寸法、縦(表紙 三十、三cm)、全長 四百八十cm ⑮字高 二十五、四cm ⑯本文の一行の字数 十六〜二十字程度。⑰絵の状態、数量 良好で美麗。濃彩 上巻全五図残存。⑱その他 奥書なし。ボドリアン文庫の蔵書印のみ。

本書は、上巻のみの零本なので、残念ながら、下巻がどのような内容であったかは、推測するしかない。取り敢えず、上巻から言える事柄について述べてみたい。

本書の題名は、『ひなつる』であって、これは、国書総目録にも記載がない。それ故、題名からは、新発見の中世小説(お伽草子)という見方もできる。しかしながら、内容的には、類似した作品もあるので、本当に、新出作品と言って良いかどうかには、やや躊躇いがある。そこで、以下、本作品と内容的・本文的に類似した作品と比較して、本書の位置づけを行ってみたい。

先ず、本書の梗概を記すと、次のようになる。

歴代の天皇の記述の後、成務天皇の家族の話になり、多くの皇子の他に、一人の美しい姫君があったことを語る。名前を、さざれいしの宮と言う。容貌が美しいだけでなく、心ばえも良く、また信仰心も篤いことが物語られる。姫宮十四才のある日、庭の松の木に真鶴が二羽やって来て巣を作り、五羽の雛を育てる。また、国土安穩を言祝ぐ哥を歌うので、不思議に思って、博士を召して占わせたところ、天下太平を祝って現れた瑞祥であると説明する。そこで、姫宮は喜んで、お祝いをする。やがて、鶴の雛も成長し、親鳥は益々美しくなり、姫宮と鶴は馴れ親しむ。ある時、中国の天子が、姫宮の美貌を聞き付け、入内するように迫って、使者を送って来るが、先例がないと言って、天皇が断る。そうこうしているうちに、巢立つ時が来て、鶴が別れを惜しむので、鶴の足の赤い糸を巻いて印とし、姫宮と七羽の鶴(親鶴二羽と雛鶴五羽)は別れる。やがて、姫宮が、月を見ながら琴を爪弾くと、夢とも現ともつかないうちに、天上から、鬢蔓結って美しい天童子が天降って、明日、蓬萊から姫君の心ばえに感して仙人が訪れるので、七尺の灯台に七つの灯火を掲げ、七つの床を飾り、七種の香を焚き、準備を整え、待つように言って、再び昇天する。

姫宮が準備を整え待っていると、七羽の鶴に乗った仙人が現れ、鶴の足に巻いた糸で、先に姫宮と別れた七羽の鶴が、七人の仙人を連れて帰ってきたことが分かり、喜ぶ。姫宮は、仙人から、不老長寿の法を聞き出そうとし、仙人は、その話を物語ろうとする場面以下が欠文となっている。

上述したように、類似した内容を持った作品が幾つかある。例えば、主人公と同じ名前を持つ作品に、『さざれいし』がある。

その梗概は、丹緑本や渋川版では、次の通りである。

成務天皇の御世はめでたき御世で、皇子が三十七人の末に、姫宮が一人いて、さざれ石の宮と言った。容貌美しく十四才で摂政殿の北の政所となった。姫は仏道に志し、特に東方浄瑠璃世界の薬師如来を信仰した。ある夕べ、月を眺めている時に、薬師如来のお使いの金毘羅大將が虚空から訪れ、瑠璃の壺に入った不老不死の薬を姫に与えた。姫は、その壺に書かれた君が代の哥から名をいはほの宮と替え、薬を嘗めることで、八百才の寿命を保ち、成務天皇以下十一代の御世も、変わらぬ美しい姿で過ごした。ある夜、薬師如来が現れ、東方浄瑠璃世界へ導き、身を変えずして成仏した。

以上の梗概と比べて、分かるのは、さざれ石の宮というヒロイン名や、十四才という年齢、成務天皇の王女である点など、共通点はあるが、ここには、鶴の描写が全くないことである。また、不老不死の世界が、東方浄瑠璃世界と蓬莱という点でも相違している。もともと、蓬莱は、中国の伝説では、列子湯問篇にあるように、東方海上の遙か彼方にあるとされたから、東方という方向では、東方浄瑠璃世界と一致している。従って、何らかの混乱があるのかも知れない。また、金毘羅大將が不老不死の薬を直接持って来るのと、天童子が、仙人の来臨を告げるのとは、趣きが異なる。さらに、『さざれいし』では、単に、姫宮が月を眺めている時に金毘羅大將が突然現れるが、『ひなつる』では、月を眺めて琴を弾いている時に、夢とも現ともなく天童子が出現する。この天童子は、例えば、中世小説『あめわかみこ』天稚系（公卿物語系）に見られる、天稚御子の出現の様と極めてよく類似している。例えば、東北大学附属図書館蔵『あめわかみこ』は、次のよ

うに描く。

かくて月日も過行は、あね御せんは十七八、もうと姫君は十五と申八月十五夜の月くまなくてらし、雲のうへもすみわたりて、やうくわかぬひかりに、姫君御心をすまし、にしのたいにたち出て、みすをまきあげ、きんをしはししらへて、時のてうしにあわせて、しうふうらくをそあそはしける。人いまたねしつまらて、「いかなれば、何事につけても、かやうの人にすくれ給ふらん。」と、しるもしらぬをしなへて、すいきのなみたせきあへす。ちよはよきこしめし、「いかにや。夜ふくるに見きく人もこそ侍れ。いそき入せ給へ。」とて、あんせちの大なこんとのを御つかひにて、「とくく。」と仰せられけれども、きよしん所へいらせ給ふ。さらくまところみ給はて、御ころをすまし給ふに、夢うつともなく、きちやうのうちさよめきて、れいならぬ句ひうちこんして、御年の程はたちはかりなる天上人、玉のかぶりうつくしくめして、あてやかにおはしますか、かたはらによりふし給ふもしり給はて、……

ここでは、月を眺めて琴を弾いている姫君の許へ、「夢うつともなく」「玉のかぶりうつくしくめし」た「天上人」がやって来るのであり、印象がすこぶる似ていることは否定できまい。それ故、本来、『ひなつる』に見られるように、天稚御子か、それに近い存在が姫君の許へ訪れる話であったものが、後に『さざれいし』では、金毘羅大將と入れ替わったのかも知れない。次に、穂久邇文庫蔵『さざれ石』と比較したい。梗概は次の通りである。

名君である成務天皇には大勢の皇子の末に姫君が一人いて、「さ

「れいしの宮」と言った。容顔美麗で、十四才で摂政殿の北の政所となった。歌道・管弦を嗜み、仏道に励んだが、中でも、薬師如来を信仰し、東方淨瑠璃世界へ転生することを願っていた。ある日、薬師の名号を唱えていると、真鶴が二羽飛んできて、松の巢を懸け「松のえたには ひなつるの……」という歌を歌った。そこで博士を呼んで占わせたところ、天下太平、姫君長寿の結果が出て、姫君は喜ぶ。ある夕暮れ、月を眺めて淨瑠璃淨土を思うと、音楽が聞こえ、花が降り、美しき天童子が雲に乗って登場し、金毘羅大将と名乗って、不老不死の薬が入った瑠璃の壺を与えて帰る。壺には、君が代の哥があったので、いはほの宮と名を変えらる。その後は、年も取らず、辛いこともなく過ごし、仕える人々にも、薬師の教えを広める。ある時、薬師如来が現じて、淨瑠璃世界を目の前に見せてくれる。父の天皇も、姫宮に従って、薬師を信仰するようになる。

穂久邇文庫蔵『さざれ石』は、鶴が登場し、哥も歌うというところで、内容的には、かなり近づいている。しかし、鶴は、天下がよく治まり、姫君が不老不死になることを示す瑞祥として登場するのみで、鶴の登場はそこで終わってしまい、やはり肝心なところが異なる。博士の占いなどの共通性から、前半部分は、かなりの共通性があるが、後半からは、随分、話の趣きが異なる。薬師信仰という面も「ひなつる」には、全く見えないところである。穂久邇文庫蔵『さざれ石』は、渋川版等の古形かも知れないが、やはり、『ひなつる』とは、若干系統を異にすると言うべきであろう。なお、国会図書館蔵『鶴亀松竹物語』は、細部の違いはあるが、基本的に、この穂久邇文庫蔵『さざれ石』と極めて近い本文である。

大東急記念文庫蔵『鶴亀の草子』では、こうあん天皇の御世に、南殿の松の枝にひな鶴が舞遊び、池の汀で亀が声を挙げ遊んだことが君が代の久しき例だとして、君臣一同が祝賀を催し、夜明けに帰宅する内容で、「松のえたに、ひな鶴のまひあそへは」や「松に、ひいな鶴まひあそひ」と言った表現に、『ひなつる』と似た表現が出るだけで、内容的に一致する訳ではない。特に、これは、物語というよりも、祝儀的文辞の可能性が高いから、これ以上、比較してもあまり意味はないであろう。

高安六郎氏旧蔵『鶴亀松竹』は、駿河国興津の浦の漁師いそちたゆふが、大亀を網に懸け、それが元で富貴になる話である。不老不死の世界が蓬萊であること、「ひんつらゆふたる」童子が十二人やって来ることが、ほんの僅かに関連が見られるだけで、『ひなつる』とはほとんど共通性はない。

古梓堂文庫蔵『笠間長者鶴亀物語』の梗概は、次の通りである。人皇第六代の孝安天皇の世は、よく治まった御世であった。常陸の国笠間郡に二人の長者がいた。北の山の長者には、かたをりひめと言う姫君が、南の長者にはさくはなまるという名の男子が居た。かたをりひめは容顔類なき美人であった。ある日、庭の松の木に二羽の鶴が巢を作り、十二羽のひな鶴を育てていた。鶴は、よそにも行かず、姫君になつた。一方、さくはなまるは、色好みであったが、姫君の噂を聞き、恋の病となり、池の亀に歌を渡して、姫君に届けさせた。姫君も亀に返歌を持たせ、二人は相思相愛となった。やがて、さくはなまるが姫君の許へ通い、わりなき仲となり、六十年経っても、歳を取らず、それが、寵愛した鶴と亀の長寿を譲られたためだと分かった。ある日、夫婦は二羽の鶴に乗り、蓬萊宮に行き、不老不死の薬を持って、七日目に帰宅

した。葉を召使に与えたところ、皆若返った。それで、近郷近在の者が長者の家に集まり、やがて、都の帝の耳にも達した。夫婦は御召に預かり、鶴に乗って参上し、無位無官では対面できぬと、官位を与えられ対面した。帝が常陸の国を眺めたいと願ったので、帝に讓位を勧め、鶴に乗せて常陸へ導いた。帝も不老不死の葉で若返り、仙に通う身となったので、隱居の天皇の御所を仙洞御所というようになった。夫婦の住む山はめつくば、おつくばと言いつくばねの神と現れ、鶴と亀は、鶴の宮、亀の宮として崇められた。

姫君が松に巣くう鶴を寵愛し、長寿を授けられた点、また、鶴に乗って蓬萊から不老不死の葉をもたらす点は似ているが、亀の登場や、恋愛譚になっている点は、全く異なる。

また、『すえひろ』には、次のような記事が見られる。

鶴の卵の、わつかなる、日をかさねて、雛となり、つはさすてに、そなはる時は、雲漢の空に羽うち、なくこそ、九かうに聞え、とふに、追事あたはず、とむるに、いくるみの、をよふところにあらず。……子日の小松、引うへて、千と

せの春のはしめとて、色もときはの、若みとり、枝にはすたつ、ひな鶴の、すむといふなる、ほうらいの、山のいはねに、うこきなき國ゆたかなる、ためしとかや……

これは、『ひなつる』で、松に鶴が巢を作り、ひな鶴を育て、後に蓬萊へ渡り、仙人を連れて帰る記述と関連を見出せる内容である。特に、鶴が松の上で歌を歌う、その歌詞と共通する文言があるのが注目される。『ひなつる』の哥の歌詞は以下の通りである。

松の上にはひな鶴の、すたつは君の恵みそと、我住「國はう

オックスフォード大学ボドリアン図書館附属
日本研究図書館所蔵『ひなつる』の翻刻・注釈並びに解題

こきなき、巖のこけはおひ敷て、なつ共つきぬ」よはひをは、君もろ共に、池の水の清きなかれの未久し」

「松」「ひな鶴」「國はうこきなき」等が共通しており、『すえひろ物語』は、これを要約したのかも知れない。

但し、『すえひろ物語』は、扇の徳を説くことに主眼があり、めでたい事物が羅列されて、パッチワークの如き様相を呈しているから、この松とひな鶴、蓬萊の逸話は、その極く一部に過ぎない。

祝儀物として、他に『不老不死』や『蓬萊物語』等もあるが、鶴の記述は特に見当たらない。

上の諸作品との比較から言えば、本作品『ひなつる』は、蓬萊から不老不死をもたらす鶴の徳に主眼を置いた作品であって、葉師如來の徳を讃える『さざれいし』や鶴と亀の組み合わせや、恋愛に主眼を置いた『鶴龜物語』、並びに、扇の徳を描く『すえひろ物語』等のその他の縁起物とは系統を異にする新出作品と判断して良いのではなからうか。

附記

（本稿で、校合に使用した丹緑本・渋川版『さざれいし』、穂久邇文庫蔵『さざれいし』、国会図書館蔵『鶴龜松竹物語』、大東急記念文庫蔵『鶴龜の草子』、高安六郎氏旧蔵『鶴龜松竹』、古梓堂文庫蔵『笠間長者鶴龜物語』、赤木文庫旧蔵『すえひろ』は、室町時代物語集・室町時代物語大成、日本古典文学大系に、東北大学図書館蔵『あめわかみこ』は、拙稿「長崎大学教育学部人文科学研究報告三八号、平成元年三月」に拠る。）

整定本文・注釈

- 一、ここでは、イギリスのオックスフォード大学ボドリアン図書館附属日本研究図書館所蔵の中世小説『ひなつる』を、原本を基に読みやすい形に変え、注を付けた。
- 二、仮名には適宜漢字を宛て、すべて振り仮名を付けた。
- 三、脱字と思われるものは、注記して補った。
- 四、本文には、句読点、濁音表記も施した。
- 五、会話文・独白文・心中表現とも、原則として、『』をつけて示した。
- 六、「／＼」「ム」「々」等の踊字の符号は、現行の通常の表記法に直した。
- 七、歌は、地の文より二字下げて書き出した。
- 八、段数は、絵巻物のため、一つの本文が終わって挿絵が始まるまでを一つの段の区切りとして【】の記号で区切りを示した。
- 九、注は段数と行数、並びに該当本文を示して、解説した。

整定本文

夫れ、天地開け始まりて、天神は七代、天の七曜を表し、地神は五代、地の五行を象れり。既に人皇嫡代は、これ末永く尽きせぬ御代を表せり。是に、人皇の第一を神武天皇とぞ申ける。この帝、天下を治め給ふに及んで、四方の国々、背くものは從へ、従ふものは恵み給ひ、天下根を治め、鎮め給ひける故に、四つの海、波静かに吹く風、枝を鳴らさず、五穀豊かに、民ゆす

ぎ事、そのかみ神代の徳に同じく、その威徳を呼ぶを以て、神武天皇とぞ申奉つり侍る。それより此の方、世々の帝は万機の政、怠らせ給はず。恵みをし、国民を憐れみ給ふ事、その徳既に、古しへ今、露ばかりも、違ふ事おはしませず。しかるに、人皇十三代に当たらせ給ふ帝をは、成務天皇とぞ申奉りける。殊更、この帝は、聖徳正しくおはしまし、真の道を行ひ給ひ、繁き御恵みは、筑波山の影に準へ、国家を治め給ふ事、類なくおはしまし、民を憐れみ給ふ事、雉の子を育むか如く、理世安民の天子なりと、天下遍く尊み奉る。】(第一段)

(挿絵一・聖徳正しく行われ、民を憐れむ場面)

然るに、此帝に、皇子数多おはします。其の末に当りて、姫君一人出来させ給ふ。御名をば、さざれ石の宮とぞ申しける。帝の御寵愛斜めならず、いつきかしき給ひけり。日に添へて大人しく生ひ立たせ給ふ程に、姫君既に御年十四才に成らせ給ふ。芙蓉の顔ばせ艶やかに、柳の眉緑なり。雲の鬢いと長く、雪の肌滑らかに、たおやかなり。御容貌、光差し沿ふ心地して、この世の人とも見え給はず。しかも御心賢くおはしまし、聖經の道に暗からず、歌は神代の昔を伝へ、八雲の風を学びつつ、山橘の香を覓めて、雲居に名乗る時鳥、沢辺に匂ふ杜若、御階の下の薔薇の花、萩が花散る夕暮は、鹿の音近く聞ゆるなり。萩の枯れ葉に置く露に、いとど恨むる虫の声、空牙登る嵐には、雪気の雲もいざよふらん、これらの有り様まで、御心を寄せられ、折りに触れ、事に寄そへて詠み給ふ歌の様、又、類なくぞ覚えける。されども、姫君は、静かなる所に引き籠もらせ給ひ、四方の

山々霞籠めて、空うららかに長閑なる日影に遊ぶ糸遊は、散り交ふ花をや繋ぐらん。かかる折節、真鶴つがひ飛び来たり、御庭の松の梢に巢を懸けつつ、卵を育て温むる。日数やうやう重なりて、鶴の子既に雛と成りて、巢の上に差し上がり待り。親鶴は、いとど喜べる色有りて、松の上に舞い上がり、声を挙げて歌う歌を聞けば、

松の上には雛鶴の、巢立つは君の恵みぞと、我が住む国は動きなき、巖の苔は生ひ敷きて、撫つとも尽きぬ齡をば、君諸共に池の水の清き流れの未久し

と歌ひては舞ひ、舞ひては遊びける有様、御前に有ける女房たちを初めまいらせ、遠きより見聞人、皆、奇特の思ひをなし、めでたき御事と喜び給ひけり。】(第二段)

(挿絵二・・鶴が歌を歌い舞う様)

姫宮は此有様をご覧して、奇しきことに思しめし、博士安彦丸を召して、占はせらるるに、やがて、勅へ申して曰はく、「夫れ鶴は、陽の鳥にして、陰に遊び、呉竹のうちに鋼の氣を受けて、火の精に勝ち、自ら魂を養ふて、心妄りに騒がしからず。金の数は九つ、火の数は七つ、合わせて十六の数を備へ、生まれて七年にして羽を替へ、七年にして高く飛び、又七年にして舞遊ぶ事調子に叶ひ、又七年にして其の鳴く声四季の調子叶ひ、百六十年にして、生きたる物を殺し食らはず。千六百年にして、容貌深く、其の色白し、其の鳴声、天上に聞ゆ、或は又、其の色黒うして漆の如く、泥のために上手かされず。又、百六十年にして、雌鳥・雄鳥互いに姿を見て、子を孕み、また、千六百年の後、ただ水ばかりを飲みて、食を食らふ事なし。此の時に及んでは、鳳凰と伴ひて、大聖人の世に現れ、政直ぐなる時、必ず

形を現して、天下太平の印を示す。誠にこれ、翼有るものうちに、優れてめでたき徳を備へて、又、仙人の乗物なり。されば、鳴く声、天に聞こゆるが故に、其の頭の色赤し。水の中に食を食らう故に、嘴長く、陸に住む故に、足高くして、尾短し。雲に翔りて高く飛ぶが故に、羽豊かにして、肉疎かなり。良く息を服して、古きをはらいて、新しきを飲む故に、命永うして、はかりなし。今、占方に頭れるところ、優れてめでたき御事なり」と申ければ、姫宮大きに喜び思しめして、様々御祝いおはします。】(第三段)

(挿絵三・・博士安彦丸の占方を喜ぶところ)

かかりし程に、内外の人々、御喜び申す事限りなし。是に、かの雛鶴、やうやう卵の内を出て、松の小枝を伝はんとする折節、父鳥餌食を求めれば、母鳥番を勤めたり。是れより後は、こと故なく雛鶴既に生ひ立ちて、翼大きになりしかば、空を翔けり、雲を分けて飛ぶ事、心まなれども、少しも余所へは飛び去らずして、姫宮に馴れ奉りて、御殿の庭に遊びけり。さるほどに、夫婦二つの親鳥は、その容貌、日に添へ麗しく、頂いよいよ赤くして、言はん方なく美しく、翼の白きこと、雪よりも猶、光有り。朝夕庭に舞い遊ぶ。姫宮、これに御心を慰み給ひ、月日を送りおはします。この姫宮の御容貌世に類なく美しき事、唐土までも、その隠れなかりしかば、かの唐土の帝、此のよしを聞き伝へ給ひ、勅使を日の本へ遣はして、「この姫宮を唐土に渡し給へ。御妃に備へ奉らん」と奏聞ありけり。公卿詮議あり。「如何あるべき」と、とりどり申させ給ふところに帝のたまふやふ、「そもそもこの大和豊秋津国は、天つ神・国つ神の古しへより、今人皇の世に至りて、遂に帝の御末を異国に渡したることなし。今初め

て、姫宮を唐土に渡し奉らば、如何せん。たとひいかなる事ありとも、叶ふまじき由ご返事ましましけり。】(第四段)

(挿絵四・中国の皇帝が、姫宮さざれいしを入内を申し入れた場面。)

扱も、かの巢立ちける五つの雛鶴、姫宮に親しみ、馴れ奉り、朝夕御庭の表に舞い遊ぶ。二つの親鶴は、ある日の事なるに、姫宮の御近く参りて、御いとまを申すと覚えたり。姫宮ご覽じて、『いつ方へも行かんと思ふ心有りや。構へて、此処を思ひ忘るる事なかれ。やかて還り参るべし、さりながら、鶴も類の多き物なり。これを印にすべし。』とて、赤き糸を親子七つの鶴の足に結び付けてぞ、放ち給ひける。七つの鶴は、虚空に飛び上がり、暫く遊びて、何処ともなく、行きにけり。姫宮も此の程親しみ馴れ侍りければ、端近く立ち出でさせ給ひては、御琴を掻き鳴らし、月に嘯きおはしける所に、夢ともなく現ともなく一人の天童子の鬢結ひて、美しきが虚空の内より天降り、姫宮の御前に畏まりて申しけるは、『これより大海の内に三つの山有り、蓬萊・方丈・瀛洲と名付く。この山の内いは、諸々の仙人たち集まりておはします。君の日頃に思し召す旨有る事を聞及び給ひ、国を憐れみ、人を恵み給ふ御志を感じて、明日ここに影向あるべし。長け七尺の灯台に、七つの灯火を掲げ、御殿の内、庭の面を清めて、七つの床を飾り、七種の香を焚きて待ち給へ』とて、童子は雲路に昇りけり。】(第五段)

(挿絵五・月を眺めての姫宮の琴の演奏に、天童子が天降る場面。)

姫宮不思議に思しめし、童子の申せし如く、七尺の灯台に灯火高く掲げ、床を飾り、香を焚きて、『今や遅し』と。待ち給ふ。

かかりける所へ、五色の雲棚引き、音楽の音頻りなり。其の内より、七つの鶴にうち乗り、七人の仙人、御殿の前に天降り給ひけり。各々一羽の鶴に乗りたり。仙人たち、庭の面に下り給へば、嬉しげにて、七つながら、姫宮の御前近く参りて、音楽に拍子を合はせ舞い遊ぶをご覧するに、七つの鶴の足毎に、赤き糸のままに残り止まり侍りける。さて、仙人は、七つの床に各々座し給ふ。姫宮、有り難く思し召し、御手を合わせて、礼拝有り。『いかにもして、齢を延べ命尽させぬ理を、自らに教へて賜れ』と、申せしが、姫宮に語りて曰はく、『夫れ、世の中に、生きとし生けるもの、齢傾かず、命尽させぬことなし。齢傾かず、命長く久しく保ちて、破るることなきは、これ身の行い、心の置き所、その故有る事なり。姫宮の御心、人を憐れみ、国を恵み、孝行の想い浅からず。今、この事を感じる故に、我等これまで来たり。いでいで細やかに、先方の有様を語りて聞かせ侍らん。静かにこれを聞しめすべし』と、ありしかば、宮大きに喜び給ひ、仙人を礼拝して、その物語を聞き給ふ。】(第六段)

注釈

第一段

1行目

《天神七代》は、日本書紀正文に拠れば、国常立尊、国狭槌尊、豊斟淳尊、泥土煮尊と沙土煮尊、大戸之道尊と大苦辺尊、面足尊と惶根尊、伊奘諾尊と伊邪那美命の、独神三柱、対偶神四組の計七代を言う。

《七曜》は、日(太陽)月に、火星・水星・木星・金星・土星の五惑星を加えたもので、《天神七代》が、それに

当たると言うのである。

1、2行目 《地神五代》は、天照大神、忍穗耳尊、瓊瓊杵尊、彦火火出見尊、鵜鷲草葺不合尊の五柱で、天照大神から神武天皇に至るまでの神々で、皇統の祖神である。

《七曜》は、陰陽道で、万物の構成要素とする五つの元素で、木火土金水を言う。これが、《地神五代》に当たるといふ訳である。

5、6行目 《四つの海、波静かに、吹く風、枝を鳴らさず》天下太平で、四海がよく治まることを示す常套表現。謡曲等にも治世を言祝ぐ表現として、よく登場する。

第一段の文末 《民を憐れみ給ふ事、雉の子を育むか如く、理世安民の天子なりと、天下遍く尊み奉る。》、成務天皇の治世を言祝ぐ表現。「焼野の雉、夜の鶴」という慣用句に見られる如く、雉は野が焼けても我が子が焼かれないよう、自らを犠牲にして守り、鶴は霜が降りる寒い夜も我が子を翼で覆って守るとされ、親の子に対する情愛が深い例として使われる。ここも、成務天皇が民を憐れむこと、「焼野の雉、夜の鶴」の如くであるといふ訳である。

第二段 4行目、7行目 《日に添へて大人しく生ひ立たせ給ふ程に、姫君既に御年十四才に成らせ給ふ。芙蓉の顔ばせ艶やかに、柳の眉緑なり。雲の鬢いと長く、雪の肌滑らかに、たおやかなり。御容貌、光差し沿ふ心地して、この世の人とも見え給はず。》「姫君既に御年十四才に成らせ給ふ。」と言うのは当時の標準的結婚年齢に達したことを言う。事実、本書と共通性の高い「さざれいし」では、この十四才の年に主人公の姫君は結婚をしている。本書では、

結婚の記述がない点も他作品と異なるところであるが、設定としては、もう結婚に相応しい年齢に達したことが宣言されている訳である。「芙蓉の顔ばせ艶やかに」以下の姫君の容貌を讚える描写は、まさにそうした背景があることによって理解すべきものであろう。本書は下巻が欠如しているの、何とも言いがたいが、あるいは、下巻に姫君の婚姻の話があっても良い訳である。あるいは、そうした結婚に相応しい年齢と美貌を備えながらも結婚という現世での幸福よりも、不老不死という脱俗的幸福を望んだといふ物語であるのかも知れない。

第二段末尾近く 《真鶴つがひ飛び来たり、御庭松の梢に巢を懸けつつ、卵を育て温むる。日数やうやう重なりて、鶴の子既に雛と成りて、巢の上に差し上がり侍り。親鶴は、いとど喜べる色有りて、松の上に舞い上がり、声を挙げて歌う歌を聞けば、

松の上には雛鶴の、巢立つは君の恵みぞと、我が住む国は動きなき、巖の苔は生ひ敷きて、撫つとも尽きぬ
齢をば、君諸共に池の水の清き流れの末久し》

これは、本書の題名にもなっている部分で、「真鶴が庭の松に巢を懸け、卵が孵化して、雛鶴となって育つ」とあるのは、解題にも述べた通り、瑞祥として喜ばれた出来事で、穂久邇文庫蔵『さざれ石』等にも見られた。また、その鶴が詠む哥も微妙に変化している。穂久邇文庫蔵『さざれ石』にある哥漢字を当てれば次のようになる。

松の枝には雛鶴の巢立つを見れば、動きなき巖の方に
居る亀の千代万代と限りなく、祝ふは君のためなれや、

心も清き池水の、澄めるは広き恵みかな
 また、『すゑひろ』にある類似の描写にも漢字を宛てれば、次のようになる。

鶴の卵の、僅かなる、日を重ねて、雛となり、翼已に備はる時は、雲漢の空に羽うち、鳴く声、九阜に聞え、飛ぶに、追事あたはず、止めるに、生くる身の、及ぶところにあらず。・・・子日の小松、引植へて、千歳の春の初めとて、色も常盤の、若緑、枝には巢立つ、雛鶴の、住むと言ふなる、蓬萊の、山の岩根に、動き無き國豊かなる、例とかや・・・

これら、三者を比べることで、この歌詞の意味がおおよそ推測される。即ち、『ひなつる』で、「松の上には雛鶴の、巢立つは君の恵みぞと」とある部分は、「本来、蓬萊に住む雛鶴が、人間世界の松の樹の上に巢を営み、巢立つのは、帝の恵みの結果である」とし、姫君の居る空間が、蓬萊と同じ、不老不死の世界に変質したことを、帝のお蔭と讃えたものと言える。また、「我が住む国は動きなき、巖の苔は生ひ敷きて」は、私（鶴）我が住んでいるこの日本の国は、風雨も順調で、磐石で動くことなき堂々とした国で」という意味と、その動くことなき岩に苔が生えるまで永遠に続くということで、所謂、「君が代」の哥がイメーシされている。「動きなき巖の方に居る亀」や「蓬萊の、山の岩根に、動き無き國」の表現から、本来、この動く対象は、日本の国土ではなく、蓬萊のことであり、これは、蓬萊等の五山が、当初、海中を漂っており、波に揺られて上下していたために、そこに住む仙人の住居の流失を恐れた天帝が

十五匹の大亀に、五匹が三交替で六万年ずつ首を挙げて支えさせたという『列子』湯問篇の記事に基づくものと思われる。実際、『列子』の本文では、亀に支えられて、「五山初めて・・・動かず。」とあって、蓬萊が「動き無き」存在となったことが明記されている。

《撫つとも尽きぬ齡》とは、大智度論にある、長寿人が四十里四方の大石を百年に一度薄衣で拭う動作を繰り返し、その大石が磨滅しても、まだ終わらない長い時間を「劫」と呼ぶという話に基づくものである。長寿人の動作を、「撫つ」と表現するのは、次の歌に例が見られる。

いとけなき衣の袖はせばくともこふの石をば撫で尽くしてん（後拾遺集、賀、四三四、藤原公任）

《君諸共に池の水の清き流れの末久し》は、「池」に「生きる」が掛け詞となっており、『さざれ石』の「心も清き池水の、澄めるは広き恵みかな」においても、「澄める」は「住める」と掛かっていると思われる。

第三段1行目 《博士安彦丸を召して、占はせらるるに》姫君が、鶴の歌を不思議に思い、博士を呼んで占わせるが、その博士の名は、何故、「安彦丸」だろうか。博士が占ったのは、鶴が吉祥であることで、「七」の数字が多用されて、そのめでたさを述べる。「七」の数字は、後で説明するように、呪術的意味合いの強い語で、陰陽道・シャーマニズム・不老不死等と関わりを持つ。ここでは、鶴の本貫地である蓬萊という不老不死の世界との関わりが当然、問題となろう。蓬萊や不老不死との関係で言えば、中世小説『蓬萊物語』には、紀伊の国名草の郡に住む安曇の安彦が、蓬萊へ渡り、

不老不死を得て、最後は仙人になることが描かれている。

『蓬萊物語』の主人公の名が、安彦であることは、当然、『ひなつる』において、博士の名が『安彦丸（但し、原文は、やすひこ丸と仮名書き）』であることと関連を持つのでなからうか。

第三段2〜12行目 《『夫れ鶴は、陽の鳥にして、陰に遊び、呉竹のうちに鋼の氣を受けて、火の精に勝ち、自ら魂を養ふて、心妄りに騒がしからず。金の数は九つ、火の数は七つ、合わせて十六の数を備へ、生まれて七年にして羽を替へ、七年にして高く飛び、又七年にして舞遊ぶ事、調子に叶ひ、又七年にして其の鳴く声四季の調子叶ひ、百六十年にして、生きたる物を殺し食らはず。千六百年にして、容貌潔く、其の色白し、其の鳴声、天上に聞ゆ、或は又、其の色黒うして漆の如く、泥のために上手かされず。又、百六十年にして、雌鳥・雄鳥互いに姿を見て、子を孕み、また、千六百年の後は、ただ水ばかりを飲みて、食を食らふ事なし。』において、「鶴は鋼、所謂金属の氣と火の精を受けているとされるので、五行の内の金と火の性質を持つものと描く。また、五行では、金は四と九、火は二と七の数字が配当されるので、「金の数は九つ、火の数は七つ」と描写していることになる。その合計の十六も聖なる数として、百六十年・千六百年という纏まりが出てきているのである。色では白は金、黒は水と関連する色彩である。頂の赤さは、火と関係する。

第四段5行目 《赤き糸を親子七つの鶴の足に結び付けて》赤は五

オックスフォード大学ボドリアン図書館附属
日本研究図書館所蔵『ひなつる』の翻刻・注釈並びに解題

行の火の色、また、七も五行の火の数。

第四段十二行 《姫宮も此の程親しみ馴れ侍りければ、端近く立ち出でさせ給ひては、御琴を掻き鳴らし、月に嘯きおはしける所に、夢ともなく現ともなく一人の天童子の鬢結ひて、美しきが虚空の内より天降り、姫宮の御前に畏まりて申しけるは》渋川版『さざれ石』が、虚空から降臨した天童子を金毘羅大將とするのに対し、『ひなつる』は明記しない。挿絵も、渋川版の鎧を着けた金毘羅大將とは明らかに異なる。解題でも述べたように、『あめわかみこ』に登場する妙音の天降る天稚御子のイメージが強い。この点については、拙稿を参照のこと。

第五段11から13行目 《これより大海の内に三つの山有り、蓬萊・方丈・瀛洲と名付く。この山の内には、諸々の仙人たち集まりておはします。》蓬萊の記事は種々あるが、これは、『列子』湯問篇「齊人徐市ら上書して曰はく、『海中に三神山有り。名づけて、蓬萊・方丈・瀛洲と曰ふ。僊人之に居り。』に表現が最も近い。

第五段文末 《諸々の仙人たち集まりておはします。．．．明日ここに影向あるべし。長け七尺の灯台に、七つの灯火を掲げ、御殿の内、庭の面を清めて、七つの床を飾り、七種の香を焚きて待ち給へ」これによく似た記述が西王母伝説にある。例えば、博物誌には、次のようにある。「漢の武帝、仙道を好み、名山・大沢を祭り、以て神仙の道を求む。時に西王母使ひを遣はし、白鹿に乗り、帝に告げに当に来る。乃ち、帳九つを承華殿に供へて以て之れを待たせしむ。七月七日夜、漏七刻王母、紫雲車に乗り

て、殿の西に至る。南面に東向す。頭上に七種（勝）を頂く。・・・時に九微灯を設く。帝東面に西向す。王母七桃を索む、大きき弾丸の如し。五枚を以て帝に与へ、母二枚を食す。」これは、西王母が七月七日の七刻に七勝（髪飾り）を着け、漢の武帝の許を訪れ、七つの桃を武帝と分け合う記述で、七が呪術的数字として使われている。西王母は崑崙山、あるいは蓬萊山に住むと言われる女神で、不老不死の仙薬を持つことで知られている。『ひなつる』でも、蓬萊山から来る七人の仙人を待つために、七を多用した器物等で準備をする訳で、発想は、全く等しいと言つてよからう。

【注】

(1) 拙稿「中世小説『あめわかみこ』における挿絵と本文の齟齬について——姫君の琴の演奏と天稚御子の降臨——」（『愛文』愛媛大学国語国文学会、第二十一号、昭和六十年七月）

(2) 七という数字の持つ呪術的性格については、小南一郎氏「七夕と西王母」（『中国の神話と物語り』、岩波書店、一九八四年二月）、正道寺康子氏「『うつほ物語』における七夕——琴との関係を中心に——」（新潟大学大学院現代社会文化研究科『現代社会文化研究』第一号、一九九四年一二月）等に詳しい。

（附記。本稿は、文部省在外研究員として、英・米・愛三ヶ国で中世小説（『お伽草子』）の調査をした成果の一部である。調査の便宜を計らい、本書の翻刻を御許可下さった、オックスフォード大学ボドリアン図書館日本研究図書館館長のイズミ・タイトラー様に、衷心より謝意を呈します。）